

老狐と巨杉

—『今昔物語集』卷二十七第三十七話形成考—

馮 超 鴻

はじめに

本稿では『今昔物語集』（以下『今昔』と略す）卷二十七の第三十七話「狐変^一大榎木^二被^三射殺^{一語}」における狐の変化に注目する。今回取り上げるこの一話において、狐は巨大な杉に化け、やがて人に射殺されて絶命するという話を有している。狐が杉に化けることは、『今昔』においても、同時代の狐話においても極めて珍しい。管見の限り、平安時代の説話において、狐が杉に化ける話はわずかにこの一話のみである。

中村禎里氏は「何のために狐が大杉に化けたのか不可解だが、狐は樹霊信仰と習合しはじめていたとも思われる」と指摘し、狐が杉に化けたことの背景を、狐と樹霊信仰との習合に求めた。¹しかし、氏はまた、「その傍証はない」と重ねて指摘し、単に一つの推測にすぎないことを明示している。また、陳明姿氏はこの一話と『搜神記』卷十八の張華の話との類似性に注目し、「張華の話を踏まえているとは限ら

ないが、同じく狐と木との関わりをモチーフにしているという点で興味深い」と指摘しているもの²、このように簡単な指摘に止まり、狐と杉との関係について、さらに深く掘り下げてはいない。

本論は本話成立時の杉と狐のイメージを分析し、さらに、中国詩文の影響も視野に入れつつ、狐が杉に化ける話柄の意味することを考察し、先行研究の不足を補おうとするものである。

一、本話のあらすじ

本話は卷二十七「本朝付霊鬼」において、第三十七話の位置に配列されている。まず配列上の特徴を述べると、本巻における本話以前の説話では、怪異な現象を狐の仕業と見なす話が並べられてはいるが、話に狐そのものは登場していない。狐が話の中に初めて登場するのは本話以降である。本文の末尾に、「此ノ事ハ、只此ノ二三年ガ内ノ事ナルベシ。世ノ末ニモ此ル希有ノ事ハ有ケリ³」と記されていることから判断すると、恐らく『今昔』の編者は口承の世間話を基にし、潤色

を加えながら記録したものであろうと思われる。本話の成立年代は、『今昔』の成立年代と推測される一一一〇～一一四〇年の間であろう。編者についても解明されていないが、文学の教養を持つ知識人であると推定される。本話の内容は以下の五点にまとめられる。

- ① 中大夫である男の馬が、草を食べているうちに、姿が見えなくなり、男は従者と共に胡籙を背負って探しに行った。
- ② 二人は奈良の京の南にあたる三橋から東の山に行き、日が暮れると、中大夫はそこで見たことがないほど大きな杉を、目の当たりにした。
- ③ あまりにも大きな杉であるため、中大夫は自分の目を信じられず、従者に「お前も杉の木が見えたか」と、杉の存在を確認し、従者は「見えます」と答えた。男はきつと迷わし神に会って、思いがけぬところに来たと思ひ、恐怖を感じて逃げようとした。
- ④ その時、従者は中大夫に、杉の木に矢を射立てて夜が明けてから様子を見ようと助言し、中大夫は同意した。二人は杉に矢を射たところ、杉の木は消え失せた。二人は驚き、逃げるようにその場を去った。
- ⑤ 夜が明け、確認のため、二人はまた昨夜の場所に行くと、そこに毛のない老狐が杉の枝を一本口に銜え、腹に二本の矢を射立てられて死んでいた。昨夜の杉はこの狐が化したものであったことが判明した。

このあらすじからさらに本論と関係する三つのキーワード、すなわ

ち「巨大な杉」、「迷わし神」、「無毛の老狐」を抽出し、順番に分析しながら、狐と杉との関連を探究したい。

二、巨大な杉

およそ本話成立の時代における杉のイメージをまず見ていく。本話のタイトルと本文では、スギの漢字表記は「榲」となっている。『和名類聚抄』に「榲 スキ」、『色葉字類抄』に「杉 サム スキ 榲 ウン 同 俗用之非也」とあり、俗字などの要素を除いて、「榲」は「杉」と同じく、植物のスギを指すと理解してよからう。杉は古くから神が宿る神木とされている。『万葉集』巻九の「弓削皇子に献る歌」には、

神奈備の 神依り板に する杉の 思ひも過ぎず 恋の繁きに
(4)とあり、相手を恋い慕ってやまない心境を詠っている。「神奈備」は神霊が鎮まる場所を表し、大和の三輪山が著名である。「神依り板にする杉」という言葉から、杉の板に三輪の神の霊が宿ると見なされていたことがうかがわれる。契沖の注釈を借りれば、

杉ハ神奈備ノ神木ニテ愛シタマフ物ナレハ、ソレヲ板ニヒキテ社
 ノ内ニコメオクヲ、神ノソレニ依タマフトテカクハ名付ルナル
 ベシ。

とある。(5)三輪の神木は杉なので、三輪の神が杉または杉の板に宿ることを説明しており、杉の神木としての性質に触れている。また、時代が下り、『今昔』の成立年代に近い『大鏡』（十一世紀後半か十二世紀

前半に成立すると見る説が多い)に、

太政大臣実頼(中略)南面には、御警放ちては出でたまふことなかりき。そのゆゑは、稲荷の杉のあらはに見ゆれば、「明神、御覽ずらむに、いかでかなめげにては出でむ」

とあり、藤原実頼は南の方向に見える稲荷山の杉に対し、大変敬意を払っていることが描かれている。杉の方から「明神、御覽ずらん」と言うので、杉に神が宿っていると信じられたことがうかがわれる。(古文獻のみならず、『日本伝説大系』に収録される「神代杉」という伝説においても、杉は神木とされている。これも一つの側面から、杉の神聖性を反映しているであろう。) およそ樹齢を重ねるほど、神木としての神聖さが増し、より篤く人々に崇信されたと言えよう。

しかし、神木としての杉は聖なるものである一方、木の霊が妖怪とも見なされていた。『源氏物語』の「手習」巻の一節からも、恐らく本話の成立年代に、木の霊が妖怪に近い存在として認識されていたことが知られる。「手習」巻では、横川の僧都が宇治院の裏手に倒れていた女を発見した際に、女が化け物ではないかと疑い、

「…たとひ、まことに人なりとも、狐木霊やうの物の、あざむき
て取りもて来たるにこそはべらめ。いと不便にもはべりけるか
な。穢らひあるべき所にこそはべめれ」

と言った。「木霊(こだま)」とは、木の神のことであり、『和名類聚抄』では「樹神」と記しており、古くから木の神があると信じられていた。『延喜式』(卷三)「造遣唐使舶木霊并山神祭」の記述からも

それがうかがわれる。神は神聖な存在であるが、僧都の言葉では木霊を狐と並べ、木霊や狐を「穢らひある」ものとしている。この木霊は既に神聖さを失い、狐妖に近く妖しい存在となっている。本話の成立時、杉は神聖な神木とされる一方、妖しい存在とも見なされていたようである。(また、巨大の杉が妖精に化ける内容を持つ「私語橋」という伝承もある。この伝承は『今昔』の成立年代に近い近衛天皇〔一二四二—一二五二在位〕の時代の話とされるが、もしその当時に間違いなく存在したならば、本話の成立当時、巨木の杉が妖怪となると信じられていたことの証左ともなるであろう。)

三、迷わし神

本話では「迷ハシ神」はもとより、「迷ハシ」「迷ハサレ」の語も見られる。迷わし神とは、人を迷わせるという神であり、「迷い神」「迷わかし神」とも呼ばれる。本話以外にも、『今昔』には迷わし神に関連する説話が二話ある。卷十九の第十九話では、一人の僧侶が道を間違えて山の中で迷ってしまい、ふらふら歩きながら、

「我ハ何ニ成ヌルニカ。迷ヒ神ニ値タル者コソ此クハ有ナレ。何
チ行ニカ有ラム。怪クモ有カナ」

と呟いた。そして、すでに死去したある僧と出会い、死者の世界に迷い込んだ。迷わし神に遭えば道に迷ってしまい、不思議な異界に迷い込むと信じられているようである。また、卷二十七の第四十二話では、属邦利延が長岡の寺戸界限を繰り返し返しぐるぐる回り歩いていたことが

記され、それは迷わし神に取り憑かれたのだと解釈されている。話の最後に、

迷ハシ神ニ値ヌルハ、希有ノ事也。此ク心ヲモ□カシ、道ヲモ違ヘテ謀ル也。狐ナドノ為ルニヤ有ラム。

とあり、迷わし神は狐などの仕業であろうと推測している。『今昔』の卷二十七を通覧すると、当時の人々は靈的で不思議なものを、すべて狐のせいとする傾向のあることに気付く。恐らく狐はよく人を騙し、または、人に取り憑くと信じられていたため、迷わし神は狐のせいだろうと解釈されたのかもしれない。

再度、本稿で取り上げる一話の本文に戻って見よう。中大夫は異常に巨大な杉を発見し、不思議と思ひ従者に、

「若シ、我が僻目カ。亦物ノニ迷ハサレテ不思議ヌ方ニ来ニタルカ。此ノ立ル榎ノ木ハ、和尊ノ目ニハ見ユヤ」

と問いかけた。従者は「見えている」と答えると、中大夫はまた、「然テハ、我が僻目ニハ非デ、迷ハシ神ニ値テ、不思議ヌ所ニ来ニタルニコソ有ナレ。此ノ国ニ取テ、此許ノ榎ノ木有トハ何コニテカ見タル」

と迷わし神に遭い、思いがけぬ場所に迷い込んだことを言いながら、「此ノ国ニ取テ」以下、経験知に照らして「榎ノ木」の存在を確認すべく、再び従者に聞いた。従者は「確かに見たことがない」ことを、「更ニ思エ不待ズ。其々ニツ榎ノ木一本侍レドモ、其レハ小キ木也」と、実地に蓄えられたデータに基づいた確かな判断から返事すると、中

大夫はさらに、

「然レバヨ。既ニ迷ハサレニケルゾ。何ガセムト為ル。」

と言ひ、迷わし神に惑わされて巨大な杉に遭遇したと解釈した。また、狐の正体を見た後に、

「然レバコソ、夜前ハ此ノ奴ノ迷ハシケル也ケリ」

と納得した。

卷十九の第十九話と同様に、本話でも迷わし神に出会い、「不思議ヌ」異界に踏み込んだ。迷わし神の多くは狐の仕業だと、当時の人々が疑っていたことは先述した通りである。それに加え、巨大な杉の霊は妖しい存在の一面も持ち、人間世界で遭遇したことがない、異常に大きな杉の出現は、ちょうど迷わし神に遭遇し、迷い込んだ異界の妖異な雰囲気に対応しい。かくして、「迷わし神」、「狐」、「巨大な杉」という三者が関連性を持つようになり、中大夫が迷わし神に遭遇し、巨大な杉に驚き、そして杉の不思議を知覚して退治に及び、最後に杉の本体が狐であったというプロットが加えられた、と解釈していいだろうか。

しかしながら、この解釈には、ひとつの問題点が残っている。それは、巨大な杉は妖しい存在とされるため、本話での出現は、確かに迷わし神に遭遇し、入り込んだ異界の妖しさに対応しいが、巨大な杉自体は迷わし神、あるいは狐と直接関連していない。巨大な杉のほかに、異界の妖しい雰囲気合うものが沢山あるが（例えば、巨大な石など）、本話では、なぜ杉の木でなければならなかったのか。右の各

点以外にも他の要因があると思われる。

本話が杉の木と特定したのは、恐らく漢籍からの影響を受けた結果ではないかと筆者は考える。古代中国には、日本の神木と同じ性質を持つ「社樹」が存在している（「社樹」の種類について、松、柏、栗が挙げられている¹⁰）。しかも、後述するように、白居易や元稹の漢詩によれば、この「社樹」は狐の巢窟となり、狐と密接な関係を持つ。本話は、迷わし神や杉などの伝承を踏まえつつも、漢籍からの影響と融合し、狐が巨大な杉に化けた話素を加えたのではないかと考える。また、本話の表現に着目すると、「毛モ無ク老タリケル狐」という表現が入っている。この表現は、中国的な狐の形象が反映された痕跡であり、漢籍からの影響だと思われる。「社樹」と狐の関連を論じるのに先んじて、「無毛の老狐」という形象が、なにゆえ中国由来と言えるのかについて述べておく。

四、無毛の老狐

杉に矢を射た翌日、中大夫と従者の二人は現場に行き、そこに杉の枝を銜えたまま、息絶えた狐を発見した。原文は以下の通りである。

従者ト二人行テ見ケレバ、毛モ無ク老タリケル狐ノ榦ノ枝ヲ一ツ昨ヘタリケルガ、腹ニ箭ヲ二ツ被射立テコソ死テ臥タリケレ。

右のように、狐を「毛モ無ク老タリケル」と描いている。それでは、なぜ毛のないこと、ならびに老いていることだけが強調されているであろうか。その理由を漢籍に求めることができる。

平安時代に、『搜神記』が当時の文学に一定の影響を与えたことは、しばしば指摘されている。ここでは主に『搜神記』を使い、「無毛の老狐」という形象について考察する。まず、「老狐」についてであるが、卷十八に、

吴中有^一書生^一、皓首、稱^二胡博士^一、教^二授諸生^一。忽復不^レ見。九月初九日、士人相與登^レ山遊觀、聞^二講^レ書聲^一、命^レ僕尋^レ之。見^二空冢中、羣狐羅列、見^レ人即走^一。老狐獨不^レ去、乃是皓首書生。

とあり、先生に化けた狐の正体が暴かれ、後に「士人」に見つけられた話が載せられている。そこに、「老狐」という語が出てくる。この一話のほかに、同巻の「張華」の話や、宋大賢が鬼と化した狐を退治する話にも、「老狐」の語があり、「老狐」は漢籍の狐譚でしばしば登場する。

「老狐」である理由についても、『搜神記』に記載されている。卷十九には、背が妙に高い人が孔子を尋ねたが、結局孔子の弟子と戦って破れ、大きな鯁の正体に戻ったという話がある。孔子は鯁の妖怪が、なぜ自分を尋ねにきたかを分析した際に、

此物也、何爲來哉。吾聞、物老則羣精依^レ之、因^レ衰而至（中略）物老則爲^レ怪、殺^レ之則已、夫何患焉。

と、動物や植物が長生きすれば、妖怪になるという。いわゆる「物老爲^レ怪」の考え方を示している。この考え方は、恐らく『搜神記』が成立した当時における、道教的な内丹思想と深く関わっており、長

生きをすれば、靈力を持つようになるという思想に基づいたものである。

続いて、「無毛」に関しては、同じく卷十八に見える。北部督郵到伯夷は館で妖怪と会い、その妖怪と戦って撃退し、妖怪が正体を現すが、

照_二視_一之、老狐正赤、略_二無_二衣_一毛_一。持下燒殺。明旦、發_二樓_一屋_一、得_二所_レ髡人髻_一百余。因_レ此遂絕。

というように、「略ほ衣毛無し」と述べている。それは、毛のない狐が異常なものである、特別な妖力を持っていると考えられていたかもしれない。この表現は、『搜神記』以外の文献にも見られ、当時の中国人の狐魅に対するイメージには、「無毛」という共通の特徴のあることを示唆している。

『太平広記』卷四百四十九に「鄭宏之」(出『紀聞』)という話が載せられている。鄭宏之が人間に化けた妖怪に会い、剣で妖怪を傷つけ、窮地に追い込んだ際、そこにいたのは、「裸而無_レ毛」の「老狐」であった。また、卷第四百五十の「辛替否」(出『広異記』)では、辛替否の母が亡くなった後、靈柩からよく人の話し声が聞こえる。替否の従弟が怪しいと思い、その靈柩にいる妖怪を退治した。その妖は「一の毛無き牝野狐」であった。

「毛毛無ク老タリケル」という狐の描写には、漢籍から受けた影響の痕跡がうかがわれる。「物老為_レ怪」という考え方は、恐らく中国の宗教的な觀念の影響下にあり、決して日本古来のものではない。

よって、「無毛」という特別な形象も、当時の中国人の狐に対する共通の認識に求めることができると思われる。

五、狐と「社樹」

1、「社」と「社樹」

神木とされる杉のように、古代中国においても、人々に信仰の対象とされた木がある。それは「社樹」(複数の場合は「社林」と呼ばれる。「社」という字は、甲骨文や金文にも見られる、古い歴史を持つ漢字である。甲骨文では「示」偏が加えられず、「土」だけとなっており、元々土の神という意を表す。古代中国は二十五家族を一位として、一つの単位は一つの土の神を祭る祭場を持つ。その祭場のことも「社」と呼ばれた(日本語は社を「やしろ」と訓じ、神を祭る建物の意味合いを持つ。ここでいう土の神を祭る祭場は、必ずしも固定の建物を持つわけではない。よって、以下は社に括弧をつけて、「社」と読む)。金文ではさらに神と関わる意を示す「示」偏をつけ、しばしば「土」の上に「木」も加え、「社」(社)という形で現わされる。この字形から、「社」という空間は、木と深く関わっていることがうかがわれる。この関わりは、『周礼』にも見られる。大司徒の職務について記した条(卷十「大司徒」篇)に、

大司徒之職、掌_レ建_二邦_一之土地之圖_一(中略)辨_二其邦國都鄙之數_一、制_二其畿疆_一而溝_二封_一之、設_二其社_一稷之壇_一而樹_二之田主_一、各以_二其野之所_レ宜_一木_一、遂以名_二其社_一與_二其野_一。

とある。鄭玄がこの部分に対し、さらに、「田主、田神后土、田正之所・依也」と注し⁽¹³⁾、「田主」の意味を、后土と田正の二人の田の神が宿る木であると解釈している。『周礼』のこの部分において、大司徒は地図を作り、それを利用して「社稷」（「稷」は穀物の神、よく土の神「社」と一緒に祭られる）を祭る祭場の囲い（「壇」は祭壇を囲む堀）を定める。神の依り所として相応しい木を植え、その木の名を社の名とする、という内容が記されている。社樹は「社」という空間において極めて重要であるため、その後、「社」と「樹」が熟語化され、祭場の神が宿る木を、「社樹」と呼ぶようになった。

2、狐と「社」

さて、狐はどうやって社樹と関わり始めたのであろうか。それは、狐が「社」という空間に棲みついたことによると考えられる。前述のように、土の神「社」と穀物の神「稷」を一緒に祭る習慣があり、両者並立して「社稷」と呼ばれる。「稷狐」は、狐が「社」に棲みつくこと、またその狐を意味する（淵鑑類函）卷二六七「礼儀部十四」「社稷四」には「社狐」の語を挙げ、後述する元稹の「古社」を引くものの、「社狐」の語自体の用例は未見⁽¹⁴⁾。「稷狐」については、劉向の『説苑』「善説」篇に、

且夫狐者、人之所レ攻也。鼠者、人之所レ燠也。臣未嘗見稷狐見レ攻、社鼠見レ燠也。何則、所レ託者然也。

とあり、「社」に棲みつく狐を退治できないのは、頼るものがあるか

らだと述べている。狐は穴に棲む動物であり、狐はまた社樹の根っこなどにある穴に棲みつく。「社」という空間は神聖な場所であり、狐が棲みつくると具合が悪いので、退治すべきものである。しかし、それは簡単に退治できるものではない。『韓非子』は「稷狐」の連中である「社鼠」を挙げて説明している⁽¹⁶⁾。

君亦見^二夫為^レ社者^一乎。樹^レ木而塗^レ之、鼠穿^二其間^一、掘^レ穴託^二其中^一。燠^レ之則恐^レ焚^レ木、灌^レ之則恐^二塗^レ地^一、此社鼠之所^二以不^レ得也。

そこに棲みつく狐も当然社鼠と同じく、簡単に退治できないであろう。「社」という空間が狐の隠れる所となっている。このことから、「稷狐」（または「社狐」という言葉が生まれたのである。また、この意味からさらに拡大し、「社」は君主や権力者の譬え、狐は君主の側近に置かれ、悪弊をなす者の譬えとなった。それを好んで詠じたのが「元白」、すなわち元稹と白居易である。白居易の「代^レ書詩一百韻寄^二微之^一」に、

下^二韞驚^レ燕雀^一 韞^{ゆきて、おろ}を下して燕雀を驚かし
當道^二懾^レ狐狸^一 道に當りて狐狸を懼れしむ

の一聯がある。「燕雀」は、『史記』「陳涉世家」の「燕雀安知^二鴻鵠之志^一哉」を踏まえ、遠大な抱負を持たない平凡な人を指す。下の句の「狐狸」は、悪弊を為す小人を指すと思われる。この一聯には「社」は登場しないが、この詩に和した元稹の「酬^二翰林白學士代^レ書一百韻^一」に、

廟堂雖稷契 廟堂に稷契ありと雖も

城社有狐狸 城社に狐狸有り

とあり、城壁や「社」に棲みつくと狐が詠じられている。「稷契」とは堯・舜に仕えた二人の名臣のことで、有能な臣下の意を表す。「社」に棲みつくと「狐狸」は「稷契」に対して、小人の意を表す。

以上の用例では、狐が「社」という空間に棲みつくことに言及しているが、その境内に生じる社樹は、「社」という空間において、極めて重要な存在であるし、狐の棲みかとして、適切な場所でもある。

「社」という空間に頼る狐といえは、自然として社樹に棲みつくと狐が思い浮かぶであろう。狐が社樹に棲みつくことを、さらに明らかに述べているのが、「元白」の以下の詩歌である。

3、狐と「社樹」

白居易「有木詩」其四の全文を掲示する。

有木名杜梨 木有りて杜梨と名づく

陰森覆丘壑 陰森として丘壑を覆ふ

心蠹已空朽 心は蠹して已に空朽

根深尙盤薄 根は深くして尙は盤薄たり

媚狐言語巧 媚狐 言語巧みにして

妖鳥聲音惡 妖鳥 聲音惡し

憑此爲巢穴 此を憑みて巢穴と爲し

往來互棲託 往來して互ひに棲託す

四傍五六本 四傍の五六本

枝葉相交錯 枝葉 相交錯す

借問因何生 借問す 何に因りて生ずるや

秋風吹子落 秋風吹きて子落つ

爲長社壇下 長じて社壇の下たるが爲

無人敢芟斫 人として敢へて芟斫する無し

幾度野火來 幾度か野火來るも

風迴燒不著 風迴りて燒き著くさず

「社」の祭壇の近くに、社樹である杜梨(バラ科のとげがある喬木)が生え、虫に食われて幹の中が空洞である。狐はそれを自分の巢として棲みつくが、神が宿る社樹なので、村民は伐りたくとも伐れなかつた。何度も山に火をつけて枯草を焼いたが、風が火の方向を変え、どうしても社樹が燃えなかつた、という内容である。ここで注目したいのが、狐の棲みつく場所である。空洞になっている社樹の幹を表現する所には、「心蠹」という形容がある。「心」は中心、内部のことで、木の最も核心の部分である。その重要な部分が、狐の生活の場所とされている。しかも、狐はその中に「棲託」し、社樹に身を託している。社樹はただ単に棲みかというのではなく、狐が自分の身を守り、身を隠す所ともなっている。詩歌が描く狐と社樹の関係は、不可分なものであり、社樹の内部に身を託すため、狐は社樹の一部分となっているとも捉えられよう。

詩に現れた狐のイメージを見ると、「言語巧」というようにし、巧

言を弄する狡賢い狐として描かれている。また、「媚狐」は、妖媚をなす狐の意で、引いては、男をたぶらかす狐の意である。この語を逆にした「狐媚」という語もあり、この言葉は、よく狐女による妖魅の色合いが濃い場合に使われるという指摘もある⁽¹⁹⁾。これらの表現から狐女が権力者に頼り、人を惑わす媚態が思い浮かぶ。このような狐に棲みつかれたため、神聖な社樹は穢され、尊さが失われ、「陰森」という語で表現されている。「陰森」には「うすぐらく物寂しいさま」の意味があるが、屢々鬼や妖怪を形容する場合にも使われる⁽²⁰⁾。この言葉から、穢された社樹が想像されるであろう。

元稹の「古社」でも、社樹に棲む狐が詠じられている。この詩は、
古社基陞在 古社 基陞在るも
人散社不神 人散じて社 神ならず

唯有空心樹 唯だ有り空心の樹
妖狐藏魅人 妖狐藏れて人を魅はす

狐惑意顛倒 狐に惑されて意 顛倒し
臊腥不復聞 臊腥すら復た聞はず

という部分から始まり、最初から狐が社樹に棲みつくことを語っている。ここにも「空心」という言葉があり、「有木詩」其四と同様に、狐は空洞となった社樹の幹に巢を作っている。「藏」の言葉から、狐は社樹の内部に、身を隠す様子がうかがわれる。「有木詩」其四と同じく、社樹の内部に隠れる狐は、社樹の一部となっている。

この詩では「妖狐」と形容されている。このような妖異な狐に棲み

つかれて穢され、社廟・社祠は人に祀られていない所となり、詩では「不神」と形容されている。のみならず、社樹は狐の臭い匂いに付かれ、生臭い意味を表す「臊腥」で表現した。狐は独特な臭気を有し、現代中国では、わきがのことを、「狐臊」もしくは「狐臭」と呼ぶ。元稹の詩でも「臊腥」と表現され、「社」という空間、特にそこにある社樹が、尊い存在から、穢れたものへと墮とされた。

「魅人」または「狐惑」と、人が畏敬する社樹という神聖なる権威に依附して、人を惑わす狐が詠われている。しかも、惑わされた人は「顛倒」し、錯乱状態となっており、「有木詩」其四と同様に、狐が人を巧みに惑わすことが描かれている。

この引用の後に続く末尾の部分において、狐は退治され、悲惨な目に遭うことを通し、権力者に頼って悪弊を為す朝廷の小人が、必ず天罰を受け滅されることを暗示している。

この詩に応じ、白居易も唱和詩を作った。「和「古社」」の冒頭で、

廢村多年樹 廢村 多年の樹

生在古社隈 生じて古社の隈に在り

爲作妖狐窟 爲に妖狐の窟と作り

心空身未摧 心 空しくして身未だ摧けず

妖狐變美女 妖狐 美女に變じ

社樹成樓臺 社樹 樓臺と成る

と詠じている。元稹の「古社」と同様に、ここでも社樹が「心空」と表現され、狐が社樹の内部に巢窟を作ることから、狐は社樹の中の一

部となっている。

元稹の詩では、「人を魅はす」と記すのみだが、白居易の和詩では、狐が人を惑わす様が具体的に描かれている。狐は美女と変化し、社樹を楼台に変え、男を誘惑してそこに連れ込む。社樹は妖狐に棲みつかれて「妖狐窟」に変じ、尊さを全く失って妖気を帯びている。詩の最後に、

寄言狐媚者 言を寄す 狐媚する者に

天火有時來 天火 時として来る有らんと

という作者の見方が述べられている。元稹の「古社」と比べ、ここにいう「狐媚者」は、君主の側近くにいて、君主を惑わす美女のことを特に指していると思われる。このような者は必ず天誅が下される、という作者の意が込められている。

「元白」の詩作を通じて、そこに現れた狐と社樹を見てきた。それをまとめると、狐は空洞となった社樹の内部に棲みつき、身を隠すことで、社樹の一部となっており、社樹と密接かつ不可分な関係を保っている。社樹に棲みつく狐は「狐媚」や「妖狐」と表現され、君主や権力者に頼って人を惑わし、悪弊を為す妖しいものに擬えられている。このような妖異な狐に棲みつれた社樹は、やがて穢されて神聖さを失い、不気味さの漂う存在となった、と言えるであろう。

4、「元白」詩の伝来

詩に現れた狐と社樹・社樹との関わりは、「元白」の文集や詩集の

日本伝来によって、本話の成立時に既に知識人の知るところとなっていたと考えられる。『日本国見在書目録』の三十九「別集家」の類別に、「白氏文集七十」、「元氏長慶集二十五」、「白氏長慶二十九卷」と記され、すでに平安初期に白居易と元稹の作品が、日本に伝来していたことが裏付けられる。また、『文徳実録』の仁寿元年（八五二）九月二十六日の条には、「（藤原岳守）出爲大宰少貳。因檢三校大唐人貨物」、適得「元白詩筆」奏上。」とあり、白居易と元稹の詩集が、当時の人々に重視されていたことが分かる。本稿で取り上げた「有木詩」、「古社」、「和古社」は、それぞれ詩人の文集や詩集に入っている。「元白」詩集の伝来によって、詩に現れた狐と社樹の関わりも、日本人に読まれて吸収され、狐と社樹とが不可分の組み合わせとして、理解されたに相違ない。

周知のごとく、白居易は平安文学に甚大な影響を与えた。その作品は、詩歌や物語など、多種多様な文学ジャンルに亘って、影響を及ぼした。この点を考慮に入れると、その中に現れた狐と社樹の関わりが、説話集『今昔』所収の本話にも、吸収摂取された可能性が十分あると考える。また、元稹についても、大江維時が編纂した『千載佳句』に、六十六首の詩歌の摘句が収録されており、その数は白居易に次いで二番目に多い。藤原公任が編んだ『和漢朗詠集』にも、元稹の詩句が選録されており、平安時代に、元稹の詩歌が人々に広く読まれ、重視されていたことを反映している。文学の教養を持つ『今昔』の編者も、元稹の詩を読み、それを本話に融合し、狐が杉に化ける内容を加えた

可能性があるように思われる。

おわりに

最後に、狐と社樹との関わりが、どのように本話と繋ったのか、という問題に関して、筆者は三つの接点があったと考える。

まず、日本において、神木は神が宿る所とされ、「元白」の応酬でも知られる中国の社樹も、神の依る所とされ、日本の神木と同じ性質を持つため、両者は同一視されやすい。日本の神木の中に、松や榊などもあるが、その長寿と樹形の大きさは杉に及ばない。杉は長寿の樹木であり、千年を超えて巨木である杉は、現在も国内では、一万本以上存在していると言われる⁽²³⁾。本話では「巨木」であることが強調されているため、杉が選ばれたのであろうと推察される。

第二に、「元白」詩では、社樹は妖しい狐に棲みつかれたため、穢されて尊さを失い、不気味さを帯びる存在となった。本話では、杉の巨大さが恐怖を感じさせるほど異様であり、不気味さが漂っている。この点において、本話の巨大な杉は、「元白」詩に現れた社樹と同様のイメージをもつ。

第三に、「元白」の詩歌に現れた狐は、空洞となった社樹の内部に棲みつき、社樹とは密接にして不可分な関係になっている。これはまた、「元白」の詩歌の伝来によって日本に伝わり、当時の人々に吸収された。文学教養を持つ『今昔』の編者は、このような漢籍における社樹の性質、または狐と社樹との関係を意識し、狐に神木のイメージ

を結びつけたのではないか。すなわち、

狐——樹木

という連想が成り立つ。

また、「有木詩」と「和古社」では、「狐媚（または媚狐）」の語を使い、狐が人を惑わすことを描く。「古社」には「狐惑意顛倒」という一句もあり、人が狐に惑わされて精神が錯乱していることを語っている。本話では、中大夫が迷わし神に遭遇し、「亦物ノニ迷ハサレテ不思議懸ヌ方ニ来ニタルカ」と言い、狐に惑わされて錯乱して、不思議な所に迷い込んだことを述べている。「元白」詩に現れた狐が人を惑わすのも、ちょうど本話の迷わし神と共通点を持っている。この点から考え、

狐——迷わし神

という連想も成立する。狐と樹木との関連を合わせると、

樹木——狐——迷わし神

という三者の関係となる。このような繋がりがあるため、本話では、「中大夫が迷わし神に惑わされ、杉の巨木に遭遇して恐怖を感じ、そして、杉の巨木に矢を射て（いわゆる「破邪」の行為）、杉の巨木は狐の化けたものだとやっとわかった」というプロットが設定されたと考えてもよいであろう。

『今昔』の編者が、身近な口承の話や参考した資料を忠実に再現したのではなく、作意を加えて潤色加工を施したことは、しばしば指摘されている。本話の成立は、当時の日本の風土における杉や狐に対す

る觀念のみならず、漢籍、特に「元白」詩に現れた狐と「稷狐」「社樹」との関連も、反映されているではないか。本話の枠を越え、『今昔』の全体において本話を考察する必要もあるが、それを今後の課題として残したい。

注1) 中村禎里氏『狐の日本史(古代・中世篇)』・第一章(二〇〇一 日本エディタースクール出版社)。

(2) 陳明姿氏『今昔物語集』における狐説話と中国文学(二〇〇九『台大日本語文研究』18)。

(3) 馬淵和夫氏校註『今昔物語集四』(一九七六 小学館)。本文の『今昔』に関する引用はすべてこれによる。

(4) 小島憲之氏校註『万葉集二』・巻九・「相聞」(一九七六 小学館)。

(5) 久松潜一氏校訂『万葉代匠記四』(一九七五 岩波書店)。

(6) 橘健二氏校註『大鏡』・巻上(一九七四 小学館)。

(7) 野村純一氏『日本伝説大系』・第七巻(一九八二 みずうみ書房)に、「神代杉」の伝承がある。

長野県真楽寺に「神代杉」と言われる大木があり、かつて火災が起きたとき、祀られる神である聖天様が杉の上から人間に向かって声をかけたという。

(8) 阿部秋生氏校註『源氏物語六』・「手習」(一九七六 小学館)。

(9) 前掲『日本伝説大系』・第三巻による。福島県杉妻町の「私語橋」という伝承である。

近衛天皇の御代、内裏に妖しいことが続いた。それは陸奥国の杉の精の仕業であると陰陽師が言った。その木を伐り倒したが、引いても微動だにできなかった。杉の精が男に化けて長年通じている寡婦がいたが、その寡婦に頼み、寡婦は木に囁くと木が動いたという。

(10) 「論語」「八佾」篇に、「哀公問「社於宰我」。宰我对曰、夏后氏以松、殷人以柏、周人以栗、曰、使「民戰栗」とあり、「社樹」の種類に

触れている。

(11) 『搜神記』の引用は、汪紹楹氏校註『搜神記』(一九七九 中華書局)による。これ以下、本論、漢文・漢詩の引用は、筆者によって調点を適宜に施す、あるいは書き下す。

(12) 『太平広記』の引用は、中華書局(一九六二)『太平広記』による。

(13) 『周礼』と鄭玄の注の引用は、王文錦氏点校『周礼正義』・「地官司徒・大司徒」(一九八七 中華書局)による。

(14) 「稷狐」と後述の「社鼠」に関する説明は、堀誠氏「狐麥姐己考補」(一九九〇『早稲田大学教育学部学術研究』39、後に『日中比較文学叢考』(二〇一五 研文出版)に収録)、「城狐と日中狐譚の種々の相」(『日中比較文学叢考』第一部第四章)の指摘を踏まえたものである。氏は「稷狐」、「城狐」は君主の側近く仕え、悪弊をなす者と指摘する。

向宗魯氏校註『説苑校證』・巻十一(一九八七 中華書局)。

(15) 陳奇猷氏校註『韓非子新校注』・巻十三(二〇〇〇 上海古籍出版社)。

(16) 白居易の詩の引用は、朱金城氏『白居易集箋校』(一九八八 上海古籍出版社)による。「代書詩一百韻寄微之」は巻十三、後述の「有木詩」其四と「和古社」は巻二に所収。

(17) 元稹の詩の引用は、冀勤氏点校『元稹集』(一九八二 中華書局)による。「酬翰林白學士代書一百韻」は巻十、後述の「古社」は巻二に所収。

(18) 前掲堀誠氏の指摘による。

(19) たとえば、唐・李紳「過荊門」に、「陰森鬼廟當「郵亭」、雞豚日宰聞「膾脍」とあり、宋・李廌「千齡檜」に、「陰森古怪怪物附、雨晦每見蛟龍蹇」とある。

(20) 長沢規矩也氏編集『日本書目大成』・第一巻(一九七九 汲古書院)。

(21) 黒板勝美氏編輯『日本文徳天皇実録』・巻三(一九八四 吉川弘文館)。

(22) 有岡利幸氏「杉I」(二〇一〇 法政大学出版局)七十五ページに掲載。環境庁の調査による。

ABSTRACT

The Aged Fox and the Gigantic Cedar
— Analysis on the Forming of a Tale in *Konjaku Monogatari* —

Chaohong FENG

The Japanese folktales story collection *Konjaku Monogatari* contains a tale (Book 27, Tale 37) which goes like this: A fox assumed the form of a gigantic cedar tree in the mountain and played wicked pranks to people. The fox's plot eventually failed and the fox ended up being shot dead. In this paper, I study the images of the fox and the cedar in the Japanese context during the period when the story was written and analyze the fox's transformation to the cedar by examining the influence of Chinese classical literature has on this tale.

Chinese poets Zhen Yuan and Juyi Bai's works were highly renowned in Japan and were closely studied by Japanese. In the poems of Yuan and Bai, there are two recurring images: "the fox", who is commonly associated with the demonic spirit, lives in the temple where people perform sacrifices and rituals to worship the God of the Land and the God of the Harvest; "the tree" which was planted in the temple and meant to be the residence of the gods. The fox inhabits the tree and the tree is possessed by the evil spirit. As a consequence, the demonic fox and the possessed tree in Yuan and Bai's literature are viewed as an undivided entity which together represents one evil spirit. Similarly, cedar tree is believed to be the dwelling of supernatural spirit in Japan. Based on this, I conclude that the tale of the fox's transformation to cedar in *Konjaku Monogatari* is the incorporation of the images of the fox and the cedar in Japanese culture and religion, and at the same time, due to the influence of Chinese literature on Japanese literature, a Japanese variation of the similar images used in Chinese poetry.